

ンの『第2書簡』312Eで記された所の}王者^{バシレウス} Ἡλῖος^{ヘーリオス}日輪神の從者^{オバードス}で在る。】【Προσῆκειν ὑπολαμβάνω τοῦ λόγου τοῦδε μάλιστα μὲν ἅπασιν «ὄσσα τε γαίαν ἔπι πνεῖει τε καὶ ἔρπει» («Ἰλιάς» 17.447) καὶ τοῦ εἶναι καὶ λογικῆς ψυχῆς καὶ νοῦ μετείληφεν οὐχ ἥκιστα δὲ τῶν ἄλλων ἀπάντων ἑμαυτῶ· καὶ γάρ εἰμι τοῦ βασιλέως ὀπαδὸς Ἡλίου。】(1696年 Leipzig 刊 Spanheim 編集版 130B)。【この事[私的日輪神礼拝]の他より確かな証拠を私が有するのは、一面わが家で自分自身の下[に備えられた祭壇]。他面以下の事を語る事が私には[神の怒^{ネメシス}の報復を招く事の無い^{テミス}正しい掟である、[即ち]深く根^{エン}付^テいて^ケいるpf、私[の心]には、少年の頃より日輪神の様々な光輝への[畏怖の念を起させる]δεινός^{デイノス}荘嚴な πόθος^{ポトス}憧憬が、そして当^{アイテール} αιθήρ^{ヘーリオス}神気圏の φῶς^{ポース}光明へと、子供の時から完全に想念を私は委ね[専心し]ていた。結果かくして日輪神に真剣な眼指を向ける事を私は切望していたのみならず、また或る時かつて夜間に曇り無き明澄な[神気の]αιθρία^{アイテール} 蒼穹^{アイトリアー} [の星空]の下で外出した折いつも、万事を纏めて断念しておいて、諸[星辰の]οὐρανός^{ウーラノス}天界の [p.100/p.101] 様々な κάλλος^{カロス}美に没頭していた、仮に誰かが何かを私に語っているにしても、なお何一つ気付く事無く、また私自身自己自身に心向けず、自分がしている事に留意する事も無く。】【Τούτου δὲ ἔχω μὲν οἶκοι παρ' ἑμαυτῶ τὰς πίστεις ἀκριβεστέρας· ὁ δὲ μοι θεμίς εἰπεῖν καὶ ἀνεμέσητον, ἐντέτηκέ μοι δεινός ἐκ παιδῶν τῶν αὐγῶν τοῦ θεοῦ πόθος, καὶ πρὸς τὸ φῶς οὕτω δὴ τὸ αιθέριον ἐκ παιδαρίου κομιδῆ τὴν διάνοιαν ἐξιστάμην, ὥστε οὐκ εἰς αὐτὸν μόνον ἀτενὲς ὄραῖν ἐπεθύμουν, ἀλλὰ καί, εἴ ποτε νύκτωρ ἀνεφέλου καὶ καθαρᾶς αιθρίας οὐσης προέλθοιμι, πάντα ἀθρόως ἀφεις τοῖς οὐρανίοις [底本 Budé 版 Œuvres complètes de Julien. Tom.2. Part.2. 1964. p.100/p.101] προσεῖχον κάλλεσιν, οὐκέτι ξυνιεις οὐδὲν εἴ τις λέγοι τι πρὸς με οὔτε αὐτὸς ἑμαυτῶ ὅ τι πράττοιμι προσέχων】(Spanheim 版 130C-D) 【また私はそれら[神気圏の光明とか諸天界の様々な美^{カロス}]に対し人並み以上の探求熱心さを有し、かつ多事に手を出す者であると思われており、更に人は丁度鬚の生えた私を^{アストロ・マギア}占星術師と看做した。[Spanheim 版 130D/131A] だが神々にかけて誓うが、その様な[占星術]書物は決して私の手に入らなかったし、また私はそもそもこの事柄[占星術]が何であるか、それ迄の所心得が無かった。所で何故こうした[占星術]の事を私は述べるのか? [むしろ]私は一層より重大な諸事を語らねばならない。即ち当時どの様に神々に関し私が考えていたのかを、話してしまえるなら良いのだが。λήθη^{レーテ}忘却されて在れ、あの σκότος^{スコトス}暗闇[新興宗教キリスト教支配下で教育を受けた私の少年時代]は。諸々の 証拠^{セーメイオン}であれ、私により語られた次の事が。至る所で οὐρανός^{ウーラノス}天界の[神気圏]のφῶς^{ポース}光明が私の周囲を照らし、私を目覚めさせ、私を^{テアー}θεά^{テアー}観想へと駆り立てた。その結果既にまた私は^{バーン}πάν^{セレーネ}万有に逆行する^{セレーネ}σελήνη^{セレーネ}月[神]の運行を私は自分自身[独学]で理解した、その様な事柄に関する知恵の探求者φιλοσοφῶν[=φιλόσοφος]達の誰にも決して出会う事無く。】【ἐδόκουν τε περιεργότερον ἔχειν πρὸς αὐτὰ καὶ πολὺπράγμων τις εἶναι, καὶ μέ τις ἤδη ἀστρόμαντιν ὑπέλαβεν ἄρτι γενεΐτην。】[Spanheim 版 130D/131A] Καίτοι νῆ τοὺς θεοὺς οὐποτε τοιαύτη βίβλος εἰς ἐμὰς ἀφίκτο χεῖρας, οὕτε ἠπιστάμην ὅ τι ποτέ ἐστι τὸ χρῆμα πάποτε. Ἀλλὰ τί ταῦτα ἐγὼ φημι, μείζω ἔχων εἰπεῖν, εἰ φράσαιμι ὅπως ἐφρόνουν τὸ τνηκαῦτα περὶ θεῶν; λήθη δὲ ἔστω τοῦ σκότους ἐκεῖνου. Τὸ δὲ ὅτι με τὸ οὐράνιον πάντη περιήστραπτε φῶς ἠγειρέ τε καὶ παρῶξυνεν ἐπὶ τὴν θεάν, ὥστε ἤδη καὶ τῆς σελήνης τὴν ἐναντίαν πρὸς τὸ πᾶν αὐτὸς ἀπ' ἑμαυτοῦ κίνησιν ξυνεῖδον, [Spanheim 版 131A/B] οὐδενὶ πω ξυντυχῶν τῶν τὰ τοιαῦτα φιλοσοφούντων, ἔστω μοι τὰ ῥηθέντα σημεῖα。】(Budé 版.2.2. p.101)

早速ホメーロス (『イーリアス』第17歌・第447句) が引用され、結局は知恵の探求者[=哲学者^{ビロ} φιλόσοφος]が話題と成っているのは、両者の作品、つまり『イーリアス』やプラトーンの『^{ポリテイアー}国家』が、古典古代ギリシア文化遺産の保護者ユーリアーノスにとっては、βιβλία^{ビブリア}諸書の中の^{ビブリア}諸書、つまり^{ビブリア}βιβλία^{ビブリア}聖書だからである。他方キリスト教の^{ビブリア}聖書の方を目下ユーリアーノスは、「λήθη^{レーテ}忘却されて在れ、あの σκότος^{スコトス}暗闇[新興宗教キリスト教支配下で教育を受けた私の少年時代]は。」と語る事で、

λήθη^{レーテ}忘却の河レーテの淵に沈めてしまおうとしている。これは西欧^{ルネサンス}Renaissance[文芸復興]期の新生復活の意識を思わせる。つまり古典古代ギリシア文化遺産の保護者達にとり、自分達の西欧ラテン中世が次第に暗黒時代と、詳しくは古典古代の「αιθήρ^{アイテール}神気圏の φῶς^{ボース}光明: τὸ φῶς … τὸ αιθέριον」(Spanheim 版 130C) や「οὐρανός^{ウーラノス}天界の φῶς^{ボース}光明: τὸ οὐράνιον … φῶς」(Spanheim 版 131A) の色褪せた「あの σκοτός^{スコトス}暗闇」の日蝕期と映じるに至り、むしろ「ソグラーノ^{ソグラーノ}ポエータ^{ポエータ}ヘーラーノス: Omero poeta sovrano」(1321 年没^{ダンテ}『神曲』「地獄」第 4 歌・第 88 句: Opere. Firenze. Società Dantesca Italiana 1960. 457 頁) を筆頭に古典古代ギリシア文化遺産の担い手達が浮上し、やがて教会の聖人達の栄光を凌ぐに至る。そして「至福」は「ギリシア」の方に在り、この「天界の神気圏の φῶς^{ウーラノス}光明」に浴さない限り、西欧キリスト教圏は「あの σκοτός^{アイテール}暗闇」から脱する事が出来ない、と言う厳粛な認識、「至福なるギリシア! : Seeliges Griechenland!」が、Hölderlin の思想詩『パンと葡萄酒: Brod und Wein』(1800 年-1801 年) 第 55 句で表明され、むしろ古典ギリシアが「あらゆる^{ウーラノス}天界の者達の住居: Haus der Himmlischen alle」(第 56 句) と解され (Stuttgarter Ausgabe [=StA]. Kohlhammer 1946-1985. Bd.2. S.91)、この古典古代の光明により浄化されキリスト教圏「西欧: Hesperien」(第 150 句: Bd.2. S.95) も「聖なる夜: heilige Nacht」(第 124 句: Bd.2. S.94) と成る。この様に長い歴史を経た後にヘルダーリンが省察した成果とは異なり、『“Ἡλιος^{ヘーリオス}日輪神頌』(362 年) のユーリアーノスはキリスト教圏をギリシアの^{アイテール}神気圏へと包容する許容力無く、彼の「あの σκοτός^{スコトス}暗闇[キリスト教支配下で教育を受けた少年時代]」は「聖なる夜: heilige Nacht」へと円熟する事は無かった。

確かに限界はあるものの、但しユーリアーノスが眼指を向けた「αιθήρ^{アイテール}神気圏の φῶς^{ボース}光明」(Spanheim 版 130C) の世界は、今日ギリシアを探求する私達にも的確な指針を与えてくれる。実際ヘルダーリンも『パンと葡萄酒』の「至福なるギリシア」(第 55 句) に関する詩節で「清澄なる大気: heitere Luft」(第 64 句) と「父なる^{アイテール}神気! : Vater Aether!」(第 65 句) を高唱しているし (StA. Bd.2. S.92)、また Hofmannsthal も紀行文『ギリシア: Griechenland』(1922 年) で、「ホメロスの男神達や女神達は恒に明澄な大気から登場してくる。この光明を識るなら、これ以上に自然なものは無い。… だがここに私達は認知する、ein Mysterium im vollen Licht (或る充ち溢れる^{ボース}光明の Μυστήριον^{ミユステリオン} 神秘) が在る事を。」(Prosa IV. 1955. S.157) と語り、ユーリアーノスの眼の付け所の的確さを証明している。また西に没する^{ヘーリオス}日輪で西方浄土を観想する『観無量寿経』の思想観を重視した空海 (774 年-835 年) に似て、当時プラトーン学徒達を含む古典古代の神観の擁護者達は「σελήνη^{セレーネー}月[神]」の「天界の φῶς^{ウーラノス}光明」の「θέα^{デア}観想」(Spanheim 版 131A) を怠らず、月[神]を他の^{ウーラノス}天界の諸天体同様崇めていたと見られる。これらが成程ヘルダーリンの歌った「神々しく美しく自然: die göttlichschöne Natur」(『あたかも祝祭の日に …』第 13 句: StA. Bd.2. S.118) の化身の故でもあろうが、同時にこれらをユーリアーノス達が、上記のホーフマンスタールの紀行文『ギリシア』で確認した様な、^{ソグラーノ}至高の詩人^{ポエータ}ホメロス風の眼で眺めている結果でもある点が重要と考えられる。この脈絡でもホメロスの遺産『イーリアス』はユーリアーノス達にとり^{ビブリア}諸書の中の^{ビブリア}諸書たる^{ビブリア}彼らの聖書に相応しい、と思われる。

他方ユーリアーノス時代 4 世紀頃に別の^{ビブリア}聖書を崇めていたキリスト教徒達は別様に考えた。例えば、ユーリアーノス著『ガラヤヤ人[キリスト教徒]達駁論: Κατὰ Γαλιλαίων [Χριστιανῶν]: Adversus Galilaeos [Christianos]』(362 年-363 年・冬期) を批判した^{アレクサンドレイア}Αλεξάνδρεια [Alexandria] の司教 Κύριλλος [Cyrillos] (370 年/380 年-444 年) の司教時代 (412 年-444 年) の作『ユーリアーノス駁論: Κατὰ Ἰουλιανοῦ: 無神論的諸事におけるユーリアーノスの諸事に抗し: Πρὸς τὰ τοῦ ἐν ἀθέοις Ἰουλιανοῦ』(Patrologiae cursus completus. Migne 1844-1866. Patrologia Graeca 1857-1866 [=PG]/Patrologia Latina 1844-1864 [=PL]. PG. Tom.76. 1859. Col.510B) 残存 10 書 (PG. Tom.76.

私[達]が紹介しよう。「始源で、一 即ちモーセは[こう]語っている 一 創造した、その[定冠詞 ó 故こう理解される : 『旧約聖書』の唯一]神は、天界と大地を。」(『七十人訳 : Septuaginta』よりキュリロスは引用 : Vol.1. Pagina 1) 【Καὶ ἀπαζαπλῶς ἐκάστῳ τῶν παρὰ Θεοῦ γεγονότων ἐπιφημίζοντες τὸ δοκοῦν, προσεκύνησαν ὡς θεοὺς. Ὅτι δὲ σαφῆς, καὶ εὐσύνοπτος, καὶ οὐδὲν ἔχον περιειργασμένον, καὶ σὺν ἀκριβείᾳ πολλῇ, τῆς κοσμογονίας ὁ λόγος τῷ θεοπεσίῳ γέγονε Μωσαεῖ, φέρε δὴ, φέρε, καταδεικνύομεν. «Ἐν ἀρχῇ γὰρ, φησὶν, ἐποίησεν ὁ Θεὸς τὸν οὐρανὸν καὶ τὴν γῆν.»】(PG. Tom.76. Col.584A)。

教父キュリロス自身もその神と定冠詞付きで引用している『七十人訳 : Septuaginta』の『創世記』1・1 に関し彼が言いたい事は、「ἡλιος日輪[神]も σελήνη月[神]も、諸星辰も φῶς光明も」(581D) 「神に抛り創造され今在る諸[被造物] : παρὰ Θεοῦ γεγονότα」(584A) に過ぎないのであるから、崇拜に値せず、又これらを異教の神々として畏敬する事は εἰδωλολατρία 偶像崇拜 (或いは εἰδωλολατρία 偶像崇拜) [羅 idololatria] ゆえ、排斥されるべきである、と言う事である。この様に事実キュリロスには「日輪[神]も月[神]も、諸星辰も光明も」、モーセが δεκάλογος 十戒で忌避せよと定めた εἰδωλον 偶像 [羅 idolum] に他ならなかった。なぜなら唯一神のみ礼拝し、決して他の神々を崇敬してはならない、と十戒が厳しく戒めているからである。【私[唯一神]以外の神々が汝にとっては存在する勿れ。一 [«Exodos» 28・3/4] 創出する勿れ、汝自身に εἰδωλον 偶像 を … : οὐκ ἔσσονται σοι θεοὶ ἕτεροι πλὴν ἐμοῦ。一 [3/4] οὐ ποιήσεις σεαυτῷ εἰδωλον. [...]] (『出エジプト記』20・3-4: Vol.1. Pag. 119)。結局キリスト教一色の西欧ラテン中世まで偶像として軽視された日輪が、イタリア Renaissance 文芸復興の 15 世紀に続く 16 世紀日輪中心主義 Heliocentrismus (地動説) の提唱と共に浮上する。【実に万有諸物の中心に座す、日輪は。即ち誰がこの最美の神殿[たる宇宙世界]の中でこの[日輪]の光輝を、万物を同時に照明可能な所[宇宙世界の中心]とは別の所、ないし一層良き所に置くだらうか?】【In medio vero omnium residet Sol. Quis enim in hoc pulcherrimo templo lampadem hunc in alio vel meliori loco poneret, quam vnde totum simul possit illuminare?】(Copernicus, Nicolaus: Gesamtausgabe. Begründet im Auftrag der Deutschen Forschungsgemeinschaft. Hrsg. von der Kopernikus-Kommission. Bd.II. De Revolutionibus Orbium. Textkritische Ausgabe. München. R. Oldenbourg 1949. S.26 [1.10])。

Copernicus は『諸天界の諸回転について : De Revolutionibus Orbium』(1543 年) 第 1 書・第 10 章 (Liber 1. Caput 10) を更に続ける。【まことに不適切では無い故、[日輪を]或る者達は[宇宙]世[界]の光明と、他の者達は叡智と、別の者達は指揮者と呼んでいる。[日輪を]三重に偉大な [Τρισμέγιστος]Hermes は[人に]可視の神と、Σοφοκλής[Sophocles]の[悲劇]『Ἠλέκτρα : Electra』は万有諸物を観入る者と呼んでいる。かく[古典文献の証言で]得られた謂わば王者の玉座に日輪は坐し、諸星辰の周天する一族に君臨する。】【Siquidem non inepte quidam lucernam mundi, alij mentem, alij rectorem vocant. Trismegistus visibilem deum, Sophoclis Electra intuentem omnia. Ita profecto tamquam in solio regali Sol residens circumagentem gubernat astrorum familiam.】

(S.26 [1.10])。天文学者の筆致は科学者の散文に留まらず、文芸復興の Humanitas [人文教養] で文飾され、何時とは無しにユリアーノスの『王者 Ἡλιος 日輪神頌』を連想させる程である。例えば形容詞 regalis (rex [王者]の) など正に βασιλεύς [王者] (上記プラトーンの『第 2 書簡』312E : 善[美]の ἰδέα 理念) に繋がる。ここで古典古代文献は、13 世紀 Schola 神学が心傾けた緻密な Aristoteles [Aristoteles] 的論証より、むしろ雄渾なプラトーンのパロディ風修辞に繋がる要素を多く持っている。例えば話題の『Copernicus 全集』第 2 巻・[26 頁の Sophocles Electra への註]442 頁が記すソポクレースの悲劇『エレクトラー』など、彼の humanitas 人文教養の恰好の証左となる。【更に天界において偉大な [174/175] 雷神、万有諸物を観て司る者、】[ἔτι μέγας οὐρανῶν [174/175] Ζεὺς, ὃς ἐφορᾷ πάντα καὶ κρατύνει:] (第 174 句—第 175 句 / 第 824 句—第 826 句 : Sophocles. Trago-

dae Tom.1. Leipzig. Bibliotheca Teubneriana 1975. Pag.67/Pag.92) 【全体何処でZeusの諸雷撃が、また何処で輝く[固有名詞だと日輪神の息子 Φαέθων]のか、[824/825] 日輪神は、もし両神がこれらを観て、静穏に隠蔽するならば?】【πῶς ποτε κεραυνοὶ Διός, ἢ πῶς φαέθων [824/825] Ἄλιος, εἰ ταῦτ' ἐφορῶν- [825/826] τες κρύπτουσιν ἔκηλοι;】。

『エレクトラー』はソポクレスの劇であり、それは[世の悲劇]全部の中で、最も陰惨であると同時に、至高の光明に満ちている劇である。(«La source grecque» Gallimard 1953) と、Simone Weilは『ギリシアの[源]泉』(執筆 1936年-1942年)所収の『エレクトラー』(1936年)冒頭を切り出している。そして別論『[姉]エレクトラーの悲嘆と[死別した筈が生還した弟]Orestesの認知: Plaintes d'Électre et reconnaissance d'Oreste』(1942年)で彼女ヴェイユは、「エレクトラーが現世おける流謫の[罪]人の魂で、悲惨に陥っており、そしてオレステースがキリストで在ると考えるなら、」と言う条件文の形で、自身の独自の解釈の核心を語っている。つまり絶望の淵に沈んだ姉エレクトラーの眼前に思いもかけず現れた希望の光明がオレステース認知で、この際ソポクレスはオレステースに向かいエレクトラーに、【お親愛この上なき光明よ。: ὦ. φίλτατον φῶς。】(第 1224 句: Tragoediae Tom.1. Pag.107) と叫ばせている。恐らく『諸天界の諸回転について』第 1 書・第 10 章でCopernicusが、Sophoclis Electra (ソポクレスの『エレクトラー』)を lucerna mundi ([宇宙]世界[の]光明)かつ visibilis deus ([人に]可視の神)である Sol (日輪)に、即ち tamquam in solio regali Sol residens (謂わば王者の玉座に坐す日輪)に関連させた時、古典ギリシア悲劇『エレクトラー』にヴェイユが見出した φίλτατον φῶς (親愛この上なき光明)に疎遠では無かつたであろう。むしろ明らかに彼が、既成宗教の教会聖堂では無く、彼自身探求する宇宙世界を hoc pulcerrimum templum (この最美の神殿)と呼んでいるのであるから、何より彼の念頭にあるのは「神々しく美しき自然」と考えて良いであろう。すると彼の『諸天界の諸回転について』に、同じ日輪中心主義Heliocentrismus者ユーリアーノスの『王者“Ἡλιος日輪神頌”の上記引用の言葉が協和しても不思議ではない。「少年の頃より日輪神の様々な光輝への[畏怖の念を起させる]δεινὸς荘嚴な πόθος憧憬が、そして当神気圏の φῶς光明へと、子供の時から完全に想念を私は委ね[専心]していた。結果かくして日輪神に真剣な眼指を向ける事を私は切望していたのみならず、また或る時かつて夜間に曇り無き明澄な[神気の]蒼穹[の]星空の下で外出した折いつも、万事を纏めて断念しておいて、諸[星辰の]天界の様々な κάλλος美に没頭していた」。

「二つの事が心情を恒に新たで弥増す驚嘆と Ehrfurcht (畏怖) で満たす、度重ね一層長く持続し追思惟がそれらと携わると: der bestirnte Himmel über mir (わが頭上の諸星辰の天界)と、das moralische Gesetz in mir (わが内なる道德律)。(Kant『実践理性批判: Kritik der praktischen Vernunft』(1788年)結語[288]: Kants Werke. Akademie-Textausgabe. Berlin. Gruyter 1968. Bd.5. S.161)。これはKant自身の墓碑銘にも取られた文言である。コペルニクス同様カントも既成宗教キリスト教圏の学者なので、「わが内なる道德律」となると微妙に古典古代の神観から外れるであろう。しかしプラトーン学徒ユーリアーノスの場合は当然上記「善[美]の ἰδέα理念」(『国家』505A等)が「わが内なる道德律」の中枢に来る。これに対し「わが頭上の諸星辰の天界」に関しては、話題の三者皆「諸[星辰の] οὐρανός天界の κάλλος美に没頭していた」(τοῖς οὐρανόις προσεῖχον κάλλεσιν)ことは確かであろう。但し、教会権力が衰え始めた啓蒙期 18 世紀にカントが公然と προσεχει没頭するのに対し、南蛮と言われたポルトガル人が戦国時代 1543 年頃種子島に鉄砲を持ち込んだ宗教改革・対抗宗教改革期 16 世紀、同 1543 年『諸天界の諸回転について』を出した天文学者の場合、事情は複雑であった。実際この名著がローマ普遍教会の禁書目録から外されたのは啓蒙期中葉 1757 年であり、この辺の事情をカントが愛読した詩人Hallerが 1761 年『Buffon著「博物誌」独訳への序言』でこう述べている。「プトレマイオス説は虚偽であった。それに根拠が無い事を誰も疑わない。

… 竟に夜明けが来て、結晶の如き [S.114/S.115] 天界、世界の中心を占める地球の高慢な地位、太陽や恒星群の無用の速度、それに当学説の別の誤謬が色々と、真理から隔てられたのだ。」(Tagebuch seiner Beobachtungen über Schriftsteller und über sich selbst. Bern 1787. 復刻版. Frankfurt a.M. Athenäum 1971. Teil 2)。ここで「世界の中心を占める地球の高慢な地位」で暗に地球上で権力を発揮していた旧教ローマ^{カトリカ}普遍教会を、新教^{カルヴァン}派^{ヘラー}Hallerが意識している事は否めない。とにかく啓蒙期 18 世紀には「わが頭上の諸星辰の天界」と「わが内なる道徳律」、換言すれば自然と良心が相互に美しく協和しており、この先駆けがユーリアーノスに認められる。

実際 Ehrfurcht (畏怖) と言うカントの墓碑銘中の言葉は、前述^{ヘーリオス}『日輪神頌』の形容詞«δεινός» (deinos)を思わせる。一応^{デイノス}deinosを既に「荘厳な」と和訳しておいたが、この言葉に関しては、これを巧みに説明している宗教学者^{カトリカ}Rudolf Otto著『聖なるもの : Das Heilige』(初版 1917 年. 第 30 版 1937 年) 第 7 章の冒頭を引用するのが適切であろう。【特に翻訳困難な言葉で、奇妙なほど多岐にわたる理解困難な概念なのが、ギリシア語の^{デイノス}deinosである。… その語義の基底は^{スミノーゼ}Numinose (Numen^{スーメン}神靈)的なもの)の無気味であり、この諸要素が自己展開すると、その時それは恐るべき戦慄を誘い、苛酷でありながら畏怖の念を起こさせ、強烈かつ奇妙であり、風変わりだが驚嘆に値し、怖がらせつつ魅了し、神々しいと同時に^{デーモン}Dämon[魔神]風であり、かつ^{エネルギッシュ}energisch [力溢れ威圧的]である。】(Rudolf Otto „Das Heilige“ 1917. 30.Aufl. 1937. München. Beck 1963. S.53)。それが『創世記』の言う様に神に抛り創造されようが、アリストテレースが^{ウーラノス}『天界論』2・1 で説く如く【… ^{ゲネシス}生成[・誕生]したのでも無く、この^{パース・ウーラノス}全 天界は、また消滅不可能、… そうではなく唯一で^{ヘイス}永遠、^{アルケー}始原も^{アレウター}終焉も持たぬ、^{パース・アイオーン}全 永劫よりこのかた、かつ自身の中に^{ア・ペイロス}無限の時間を有し内包している。】

(Aristotelis Opera edidit Immanuel Becker 1831. Darmstadt. Wissenschaftliche Buchgesellschaft 1960. 283B26-29) […] οὐτε γέγονεν ὁ πᾶς οὐρανός οὐτ' ἐνδέχεται | φθαρῆναι, […], ἀλλ' ἔστιν εἰς καὶ | ἀϊδιος, ἀρχὴν μὲν καὶ τελευτὴν οὐκ ἔχων τοῦ παντός αἰῶνος, | ἔχων δὲ καὶ περιέχων ἐν αὐτῷ τὸν ἄπειρον χρόνον, […]] としても、全体「諸星辰の天界」と言う自然の奥深い神秘に向けられた形容詞^{デイノス}deinosに宿る Ehrfurcht (畏怖) が、或る敬虔な宗教感情を喚起する事は確かであり、これを結びの糸としてユーリアーノスもコペルニクスも^{ヘーリオス}日輪中心主義^{ヘーリオセントリスムス}Heliocentrismus者同士として共鳴している。また至高の詩人ホメーロスは当^{ヘーリオス}deinosを使い、日輪神と同じ太陽神^{アポロン}Ἀπόλλων[Apollon]の「白銀の弩弓の轟音」を見事に表現している。【^{デイノス}deinos (畏怖と荘厳)な^{アポロン}Apollon神の]白銀の弩弓の轟音が生じた。】(『Ilias』第 1 歌・第 49 句 : Ilias. 希独対訳 Tusculum 叢書. München. Heimeran 1961. S.8) 【δεινὴ δὲ κλαγγὴ γέενε' ἀργυρέοιο βιοῖο.】。ここで「畏怖と荘厳」と和訳したのは、^{デイノス}deinosに相当すると考えられるヘルダーリンの用語«schröcklichfeierlich»を^{フォルム}念頭に置いてである。「… 場面場面において、^{フォルム}die schröcklichfeierlichen Formen (畏怖と荘嚴の諸形式) が織り成され、悲劇は異端尋問を思わせ、黒死病と狂気の下で予言精神が遍く燃え上がる世界の言葉となる。ここでは安逸の時代に、世界の脈動に何ら空隙あらしめまい、天上の神々への想起を絶やさまいとして、^{フォルム}der Gott und der Mensch (神と人とが) [悲劇の誕生と言う]万事を忘却せしめる[神の]不信実[不誠実]という^{フォルム}Form (形式) で^{フォルム}sich mittheilt (相互透入する)のである。なぜなら、神の^{フォルム}Untreue (不信実) が最もよく記憶に保持されるからである。」(St.A. Bd.5. S.201:『Oidipusへの註解: Anmerkungen zum Oedipus』1804 年・第 3 章)

先程引用の『諸天界の諸回転について』第 1 書・第 10 章で筆頭にコペルニクスが引用した文献は、^{トリスメギストス}Trismegistus (三重に偉大な[Τριμεγίστος]Ερμῆς[^{ヘルメス}Hermes]) であるが、興味深い事に当ヘルメース文書 (Corpus Hermeticum) を他ならぬ正統派キリスト教徒キュリロスが『ユーリアーノス駁論』において引き合いに出す。今日これは所謂^{グノーシス}Γνώσις 覚知 [Gnosis]文献として、千年を経て 1945 年エジプトの穴蔵から発見されたコプト語の文献^{ナグ}Nag Hammadi 写本 [Codex]などと共に、正統派

ἡμέρας καὶ τὸν φωστῆρα τὸν ἐλάσσω εἰς ἀρχὰς τῆς νυκτός, καὶ τοὺς ἀστέρας.】(『創世記』1・14-16)。
 まるで現代科学の記述さながら、ἥλιος^{ヘーリオス}日輪[神]は φωστῆρ μέγας (大きな 光体)、σελήνη^{セレーネ}月[神]は
 φωστῆρ ἐλάσσων (小さい方の 光体) と有り、「正に当今では、魂無き火の玉が自己回転している
 のであるが、[18/19] 当時は黄金の馬車を駆り日輪[神]が静かな威厳を湛えていた」(S.190/S.194)
 「振り子時計が打つ生命無き[機械]音に似て、[166/167] 今では重力法則に汝は盲目に仕える、die
 entgötterte Natur (神性を剥奪された自然)よ!」:(Schiller『ギリシアの神々: Die Götter Griechen-
 landes』1788年、第18句—第20句/第166句—第168句: Werke. Nationalausgabe. Weimar 1943ff.
 Bd.1. 1943) と、啓蒙期 18 世紀には鋭い批判が現れ、体制宗教の主キリストは新たな文芸復興以
 降の意識には、由々しい「神聖なる Βάρβαρος^{バルバロス}野蛮人: heiliger Barbar」(第114句: Bd.1. S.193)
 と映じる。

「神性を剥奪された自然」の復権が叫ばれる新世紀は、同時に科学と実証文献学の時代でもある
 ので、そう短絡的に「日輪[神]が静かな威厳を湛え」て、ユーリアーノス達古代人の場合の様に、
 生き生きと表象される訳でないし、又キュリロスの信じた神に拠る大きな 光体を産む創造活動の
 方も疑う趨勢が強い。この時『ヘルメース文書』中の上記「キュリロス[由来]の諸断片」は案外新
 鮮に受容される。理由は今日歴史遺産として『ヘルメース文書』を前述した 覚知 文献の名の下、
 反キリスト教的内容を想定して掴み気味な結果、【日輪[神]の誕生は、万有諸物の[独裁]主に拠り、
 その神聖な 創出者^{デーミウールゴース}の 言葉^{ロゴス}を介し生じて居る】(Spanheim 版 56 : PG. Tom.76. Col.588B) 【ἔστι δὲ
 ἡ γένεσις τοῦ ἡλίου ἀπὸ τοῦ πάντων δεσπότου διὰ τοῦ ἁγίου καὶ δημιουργικοῦ λόγου αὐτοῦ γενομένη.】
 (『Hermes 文書』 Tome IV. p.139) と、日輪の誕生も天地創造の『創世記』の一環に組み込まれ
 る一節の方が、むしろ人の意表を突くからである。ここの全体の構図は基本的に異教風で、【又Osiris
 曰く、おお三重に偉大な善[美]の神霊よ、[p.138/p.139 : PG.76. 588A/B] 何処より出現したのか、
 この偉大な日輪[神]は? 又善[美]の神霊曰く、Osirisよ、汝は望むのか? 日輪[神]の生誕が、何処
 より現れたのか、を私達が詳述する事を。日輪[神]が現れたのは、万有諸物の[独裁]主の神慮に拠
 る。】【Καὶ εἶπεν ὁ Ὅσιρις, Ὡ τριμέγιστε Ἀγαθὸς Δαίμων, [p.138/p.139 : PG.76.588A/B] πόθεν ἀνεφάνη
 ὁ μέγας οὐτός ἡλιος; καὶ εἶπεν ὁ μέγας Ἀγαθὸς Δαίμων, Ὅσιρι, ἡλίου γένναν βούλει ἡμᾶς καταλέξει
 πόθεν ἐφάνη; ἐφάνη προνοία τοῦ πάντων δεσπότου.】(Spanheim 版 56) と前提の後、先の文言が来
 る。用語で対照なのが、ここの「万有諸物の[独裁]主の 前ノイア^{プロノイア}神慮」と、上記『王者 日輪神頌』
 (Spanheim 版 135A) の「日輪神の 前ノイア^{プロノイア}深慮」で、後者の 前ノイア^{プロノイア}深慮 の奥に知恵で
 雷神をも凌ぐ 巨神 前ノイア^{プロノイア} Prometheus が控えており、これが神話世界への親密さを示すのに
 対し、前者がその対極にある非神話化の思想や宗教に繋がる点を留意すべきである。因みに、上に
 掲げた二箇所を「キュリロス[由来]の諸断片」の名の下に纏めた上記 Budé 版・希仏対訳『ヘルメ
 ース文書』は、実証文献学の立場から判断して、前の箇所「日輪[神]の誕生は、万有諸物の[独裁]主
 に拠り、その神聖な 創出者^{デーミウールゴース}の 言葉^{ロゴス}を介し生じて居る」に関し、【これらの言葉はキュリロスに属
 するものである : ces mots appartiennent à Cyrille】(Tome IV. p.140) と註記している。

成程それらの言葉は教父の加筆かも知れない。しかし先行の部分にも、「日輪[神]が現れたのは、
 万有諸物の[独裁]主の 前ノイア^{プロノイア}神慮に拠る。」と明記され、あくまで非神話化の傾向は有る。また「キュリ
 ロス[由来]の諸断片」は、『ヘルメース文書』第1論—第18論(Tome I. p.7-195/Tome II. p.197-255)
 を核とする Κανὼν^{カノン}正典に対し、付録の Ἀπόκρυφα^{アポクリュバ} 外典 ないし Ψευδεπιγραφή^{フセウデピグラベ} 偽典 と看做され、
 当諸断片がユーリアーノス達の異教圏に疎遠な要素を含んでいる事は否定できない。更に続く部分
 にキュリロスの加筆を指摘する格別な註記は無いが、その表現中特に【日輪[神]が存在せよ : Ἐστω
 ἥλιος.】と有る箇所は、ふと【且その[『旧約聖書』の唯一]神曰く、「光が生成してあれ」と。そし
 て光が生成した。】(『創世記』1・3 : 『Hebdomoconta : Septuaginta』Vol.1. Pag.1) 【καὶ εἶπεν ὁ θεός

Γενηθῆτω φῶς, καὶ ἐγένετο φῶς.】を連想し、ここをキュリロスが自説を堅固にする為に選んだ事が納得できる。但し、その文脈全体が前記の部分と同様、やはり同時に異教風な点も見逃せない。【直ちに万有諸物の主[神]は自己固有の神聖で叡知的で 創造的 な言葉で語った、「Ἐστω ἡλιος: 日輪[神]が存在せよ」と。こう言うと同時に、上昇する自然本性に属す火焰 (実に我言う、混じり気無く、極めて明るく、極めて活発で、極めて生命溢れた[火焰]) を、[女神]自然本性が自己固有の靈気で引き寄せ、水から分離し、高みへと招集した。】(Tome IV. p.140 : PG.76.588B) 【Ὁ δὲ πάντων κύριος εὐθέως ἐφώνησε τῷ ἑαυτοῦ ἀγίῳ καὶ νοητῷ καὶ δημιουργικῷ λογῶ, Ἐστω ἡλιος, καὶ ἅμα τῷ φάναι τὸ πῦρ τὸ φύσεως ἀνωφεροῦς ἐχόμενον (λέγω δὴ τὸ ἄκρατον καὶ φωτεινότατον καὶ δραστικώτατον καὶ γονιμώτατον) ἐπεσπάσατο ἢ Φύσις τῷ ἑαυτῆς πνεύματι καὶ ἤγειρεν εἰς ὕψος ἀπὸ ὕδατος.】(Spanheim 版 56)。結局キリスト教父Cyrillosの力点は、何もかもが「万有諸物の[独裁]主に拠り、その神聖な創出者の言葉を介し生じて居る」事に在り、こうプラトーン学徒ユーリアーノスを駁論する。【即ち今私が述べた通り、生成し今在る諸物の各々に自然本性の法を創造神は定め、神の諸々の肯諾に拠り、その様に存在する事が偶発にせよ、そうで無いにせよ、諸物は定められて現れる。一方商売の計略から自由で真直ぐに延びる言葉はその様であろう。他方尋常ならず彼[ユーリアーノス]はプラトーンの思惑に眩惑されたままpf.、こう言う。】(PG. Tom.76. Col.588C-D)【Ὡς γὰρ ἐφην ἀρτίως, τῶν γεγονότων ἐκάστῳ φυσικὸν ὥρισεν τὸν νόμον ὁ Δημιουργός, καὶ τοῖς αὐτοῦ νεύμασι, τὸ εἶναι τοιῶσδε, τυχόν, ἢ μὴ, διαλαχόντα φαίνεται. Καὶ ὁ μὲν εἰς εὐθύ τε διήκων καὶ ἀκαπήλευτος λόγος ἔχει ἂν ὠδί. Κατατέθηκε δὲ οὐ μετρίως αὐτὸς τὴν Πλάτωνος δόξαν, καὶ φησιν: [...]】(キュリロス『ユーリアーノス駁論』: Spanheim 版 57)。

「ユーリアーノスは言う。: φησιν」に続く話題の的は、プラトーンの対話篇『Τίμαιος: Timaios』の創世神話(28B-C/30B-C)で、その前半は創世神に拠る宇宙世界の誕生が述べられ、その後半は「この[世の]宇宙世界が[靈]魂と叡智の有る生物: ὁδε ὁ κόσμος ζῶων ἐμψυχον ἔννονν」(Platons Werke. [底本] «Œuvres complètes: Collection Budé 1955-1974». Darmstadt. Wissenschaftliche Buchgesellschaft 1971-1981. Tom.10. p.143: Bd.7. S.38)と記されている。普通キリスト教徒が西欧ラテン中世の時期プラトーンを読むと言えば、この『ティマイオス』の創世神話が精々だった様で、実際400年前後成立のCalcidius註解付『ティマイオス』前半17A-53C訳(公刊9世紀前半)より他に羅訳プラトーンは、漸く12世紀Aristippus訳の『Μένων: Menon』と『Φαίδων: Phaidon』、その後15世紀前半Bruni訳(『Ἐπιστολαί: 書簡』・『Φαίδων: Phaidon』・『Συμπόσιον: 饗宴』終結部215A-222B・『Γοργίας: Gorgias』・『Φαίδρος: Phaidros』・『Ἀπολογία Σωκράτους: Sokratesの弁明』・『Κρίτων: Kriton』)、遂に15世紀後半Ficino訳『プラトーン対話篇』(1484年刊)が出て、より重要な『国家』や『Parmenides: Parmenides』も羅訳され、コペルニクス達に羅訳『Hermes文書』(1471年)共々歓迎される。他方ギリシア教父キュリロスの属す東ローマ文化圏Byzantionは、陥落1453年迄プラトーンを連綿と継承し、結果その陥落前後イタリア文芸復興に影響しフィチーノ訳成立に刺激を与えた。歴史上この様に複雑なプラトーン受容史があるが、論敵同士キュリロスもユーリアーノスも古典古代末期の教養人として実際プラトーン通である。だが新興宗教に与する教父と古典古代神話世界の擁護者とは、文化遺産プラトーンの持つ意味が違う。

古代や中世のキリスト教徒にとり『ティマイオス』の創世神話が都合良いのは、上記アリストテレスの書『天界論』2・1(283B26-29)で表明された不生かつ不滅の宇宙世界観を打破する方向で役立つからである。しかし古典古代には不生で不滅の宇宙世界の方が一般で、むしろPlatonの創世神話の方が異色で在った。【天界が[唯一]であるのみならず、多[数の天界]が生成する事も不可能であり、尚天界[=宇宙世界]が永遠で不滅で不生である事を、私達は語ろう。】(277B27-29)【Ὅτι δ' οὐ μόνον εἰς οὐρανός, ἀλλὰ καὶ ἀδύνατον | γενέσθαι πλείους, ἔτι δ' ὡς αἰτίους

καὶ ποιητὴν καὶ πατέρα καὶ [Tome II. p.232/p.233] περίβολον, καὶ πάντα ὄντα τὸν ἕνα, καὶ ἕνα ὄντα τὸν πάντα [...] ἐὰν γὰρ τις ἐπιχειρήσῃ τῶ πάντα καὶ ἕν δοκοῦντι καὶ ταῦτὸν εἶναι, τοῦ ἑνὸς χωρίσαι, ἐκδεξάμενος τὴν τῶν πάντων προσηγορίαν ἐπὶ πλήθους καὶ οὐκ ἐπὶ πληρώματος, ὅπερ ἐστὶν ἀδύνατον, τὸ πᾶν τοῦ ἑνὸς λύσας, ἀπολέσει τὸ πᾶν.] (『ヘルメース文書』16・3)。ここのθεός神【男性単数】は πάντα 万有諸物【中性複数】で ἕν-者【中性単数】、かつ ἕν-者で πᾶς全者【男性単数】と多彩に表現され、更に充溢純一【中性単数】や πᾶν全【中性単数】とも言われる。即ち「その神」は「一【者】かつ全【一】: ἕν καὶ πᾶν」の宇宙世界【=天界】に他ならず、正統派キュリロスのキリスト教では単なる被造物に過ぎないけれども、これこそ古典古代の神話世界では王者である。一神教の概念なら「神と世界」と言われる全体が切り裂かれ、「唯一神」と宇宙世界に分離する事を、『ヘルメース文書』第16論・第3節は「正に不可能である事」と述べ、この根本思想ゆえ、覚知文献『ヘルメース文書』は本来ユーリアーノスの『王者日輪神頌』と共鳴する。

詰まる所キュリロスの神は「天界と大地を」(上記『創世記』1・1)、即ち宇宙世界【=天地】を唯一神の副次的従属物にし下位に置くのみならず、更に唯一神と天使達の似姿ないし類似である霊長類の人間に抛り、【天】地と天地の諸生物を支配させる。【且その【旧約聖書】の唯一神【天使達に】曰く、「私達の εἰκὼν 似姿に抛り、かつ ὁμοίωσις 類似に抛り人間を創造しよう。そして彼らが支配せよ、海の魚類を、天界の鳥類を、家畜群を、全大地【一帯】を、大地上を這う動物達を。】(『Hebdomeconta: Septuaginta』Vol. 1. Pag. 2)【καὶ εἶπεν ὁ θεός Ποιήσωμεν ἄνθρωπον κατ' εἰκόνα ἡμετέραν καὶ καθ' ὁμοίωσιν καὶ ἀρχέτωσαν τῶν ἰχθύων τῆς θαλάσσης καὶ τῶν πετεινῶν τοῦ οὐρανοῦ καὶ τῶν κτηνῶν καὶ πάσης τῆς γῆς καὶ πάντων τῶν ἐρπετῶν τῶν ἐρπόντων ἐπὶ τῆς γῆς。】(『創世記』1・26)。文言上は「全大地【一帯】を彼ら【人間】が支配せよ」と大地のみ支配対象であるが、前掲『出エジプト記』20・3「私【唯一神】以外の神々が汝にとっては存在する勿れ。」から、唯一神だけ拝み、天界とその中に在る日輪等は崇敬されるべきで無い、と言うのがキュリロスの神の意向であり、人間を凌ぐのは唯一神のみと成る。この霊長類特別視、Anthropocentrismus人間中心主義では人間のみ叡智を有す者、即ち「神の似姿: εἰκὼν θεοῦ」(『創世記』1・27:『Hebdomeconta: Septuaginta』Vol. 1. Pag. 2)と認められる。すると上記『ティーマイオス』30B-Cの「この【世の】宇宙世界が【霊】魂と叡智の有る生物」とされ、ユーリアーノスの『日輪神頌』の様に崇拜的と成ると、当然キリスト教父は反駁に出る。【他方ユーリアーノスは何故この事を嘲笑するのか? 即ち実に正当にも、万有諸物に関する支配の名誉を与えられ今有する事pf.を、[A/B] 叡智を有し理的で大地上の生物達の中で最も神に似た者が、実に私の言う ἄνθρωπος 人間が。】【Κατασκώπτει δὲ ἄνθ' ὅτου καὶ τό γε δὴ δεῖν ἀρχὴν τετιμηθῆναι τῇ κατὰ πάντων, [592A/B] τὸν ἔννοον τε καὶ λογικόν, καὶ θεοειδέστατον τῶν ἐπὶ γῆς ζώων, φημί δὴ τὸν ἄνθρωπον;】(PG 76.592A-B/593C)【どうして神は、生成誕生に相応しく無いと思う諸【被造】物に君臨する事を自ら選んだのであろうか? 或いは実際なぜ私達の下で諸崇拜を神が喜ぶのか? もし私達【人間】を創造する事がそもそも【万物の】支配に適切と神が考えたので無いなら。】【Πῶς δ' ἂν ἔλοιτο κρατεῖν, ὧν ἀτιμάζει τὴν γένεσιν; ἢ τίνα δὴ τρόπον ταῖς παρ' ἡμῶν λατρείαις ἐπιγάννυται, εἰ μὴδὲ κτίζειν ἡμᾶς ὄλως ἠξίωσε τὴν ἀρχὴν;】(キュリロス『ユーリアーノス駁論』第2書)。

「だが私は知っている。固有の Schuld 罪 [48/49] なのだ! つまり余りに、[49/50] おおキリストよ、私は汝に愛着を懐き過ぎている。」(StA. Bd.2. S.154)【Ich weiß es aber, eigene Schuld [48/49] Ists! Denn zu sehr, [49/50] O Christus! häng' ich an dir,】。こうヘルダーリンは讃歌『唯一者: Der Einzige』初稿(1801年-1802年)第48句以下で、自己の罪責意識を告白している。キュリロスの時代400年前後から千年以上も歴史を積み重ねた1800年頃に至ると、これ程キリスト者の心にも濃淡細やかな陰影が萌してくる。既に警句詩『あらゆる悪の根源: Wurzel alles Übels』(1799

年)でヘルダーリンは、「Einig^ア協和一致が神々しく善である、全体^{いすこ}何処より人々の下に例の Sucht^{ズフト}欲望は来たのか? ただ Einer^ア唯一者のみ、Eines^ア唯一存在のみ有れ! という欲望は何処より?」(StA. Bd.1. S.305)【Einig zu seyn, ist göttlich und gut; [...], daß nur Einer und Eines nur sei?】と語り、結局キュリロスには思い付かない新たな視点から、自己の属するキリスト教圏を眺めている。目下ユーリアーノスを鑑みて、コペルニクスが hoc pulcerrimum templum (この最美の神殿)と呼んだ宇宙世界^{コスモス}に関し、その「わが頭上の諸星辰の天界」に焦点を当て、当論では、この「天界^{ウーラノス}も大地も、ήλιος^{ヘーリオス}日輪[神]も σελήνη^{セレーネー}月[神]も、諸星辰も」(PG. Tom.76. Col.581D)、結局、「始源で、創造した、その[『旧約聖書』の唯一]神は、天界と大地を。…」(『創世記』1・1以下)と言う前提から、創造された被造物に過ぎない故、これらを美化する事は避けるべきであると主張するキュリロスの見解をも加味して考察を進めて来た。上記カントの墓碑銘の場合、「わが頭上の諸星辰の天界と、わが内なる道徳律」の両者は釣り合い良き平衡を保っている訳だが、この均衡が破れそうな所にヘルダーリンは危惧を感じ、eigene Schuld (固有の^{シュルト}罪)や禍々しい Sucht (欲望^{ズフト})を認めている。この点キュリロスには双方の不調和が生じるが、それ故その両者の調和を目指すユーリアーノスの「諸星辰の天界」に向けられた「^{デイノス}荘嚴な^{ポトス}憧憬」が一考に値するのである。

【Jinbun-kagaku-kenkyû 2010 : Geisteswissenschaftliche Studien der Philosophischen Fakultät der Universität Kôchi (=Kôtzschi) im Jahre 2010. Band 16 herausgegeben von der geisteswissenschaftlichen Abteilung der Philosophischen Fakultät der Universität Kôchi (=Kôtzschi): Études des sciences humaines de la Faculté des Lettres de l'Université de Kôtchi en l'an 2010. Tome XVI édité par la section des sciences humaines de la Faculté des Lettres de l'Université de Kôtchi:Kôchi-daigaku. Jinbun-gakubu. Ningenbunka-gakka. Editio die I Julii euro-anno MMX】

